

# 紀 要

第 9 号

1 9 9 6 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

# 目 次

## 序

‘廃棄’を考えるー貝塚出土資料の検討にあたっての試論ー〔鈴木康二〕	1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動ーセタシジミの成長速度と年齢構成ー〔稲葉正子〕	11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕	16
篋状木製品の用途について〔松澤 修〕	25
縄文晩期土器棺墓の調査方法についてー近畿地方の場合ー〔中村健二〕	38
近江における弥生社会の理解にむけてーその方法と課題ー〔大崎康文〕	42
長浜市域における弥生時代の石器ー今川東遺跡出土石器を中心にー〔稲葉隆宣〕	51
石組みの煙道を持つカマドー古代の暖房施設試論ー〔上垣幸徳・松室孝樹〕	57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕	79
近江へのアプローチ・その3ー野洲・栗太をフィールドにー〔近江歴史クラブ〕	85
1. 野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕	89
2. 栗太・野洲における後期古墳の類型的把握 ー古墳時代システム論への墓制的アプローチー〔細川修平〕	94
3. 集落遺跡から見た古墳時代の特質ー古墳時代システム論への予察ー〔細川修平〕	102
4. 栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕	110
5. 近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕	122
6. 古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕	130
7. 田原道をめぐる二つの地域〔重岡 卓〕	136
8. 近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕	149
9. 栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕	157
10. 鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論 ー滋賀県の事例を中心にー〔大道和人〕	164
栗太・野洲郡のまとめ	179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川 靖〕	185
古代遺跡と出土文字資料〔濱 修〕	200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕	208
巡礼者の宿ー鴨田遺跡出土の巡礼札よりー〔重田 勉〕	215
焼物二話〔稲垣正宏〕	220
蒲生稲寸氏についてー近江古代豪族ノート5ー〔大橋信弥〕	224
律令神話に於ける農業神について〔造酒 豊〕	233

日本古代の対外関係史の一様相

－日本古代史研究ノートあるいは覚書その2－〔芝池信幸〕 .....	238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕 .....	243
新聞報道にみる文化財保護25年－新聞記事データベースの作成と利用－〔中川正人〕 .....	252

# 近江における玉造りをめぐって

中村智孝

## 1. はじめに

近江における玉造りは、弥生時代中期より各地域で行なわれているのが確認されておりそのころには玉造りという技術が近江全域に広まっていたと考えられる。その後近江の玉造りは、古墳時代においても、空間的に限定されるものの全般を通じて行なわれることとなる。

なお、平成7年度に栗東町辻遺跡より石製腕飾類のひとつである石釦を含む玉造りを行なっていた工房跡が見つかるなど注目すべき報告がなされている<sup>(1)</sup>。

以上のような近江における玉造りに関しては、これまでも様々な報告がなされているわけであるが、そのような研究及び報告を中心に近江における玉造りというものを概観しながら、今回の研究エリアである野洲・栗太郡という地域における玉造りについて見ていきたいと思う。

## 2. 近江における玉造りについて

### (1) 弥生時代中期以降

弥生時代中期以降の玉造り遺跡（及び玉造り遺跡と考えられるもの）は、ほぼ全域で確認されている<sup>(2)</sup>。主な遺跡を挙げて見ると、北仰西海道遺跡（今津町）、横山遺跡・高月南遺跡（高月町）、鴨田遺跡・塚町遺跡（長浜市）、大中の湖南遺跡（安土町）、市三宅東遺跡（野洲町）、烏丸崎遺跡・宮前遺跡<sup>(3)</sup>（草津市）などをあけることができ、それらを含めて近江全域で約23遺跡ほど確認されている<sup>(4)</sup>。これらのほとんどの遺跡は、弥生時代中期が中心でありそれ以降に比定されている遺跡は比較的少ない。

このような状況の中で今回とくに注意しておきたいのは、さきほどから何回も述べているように弥生時代の玉造りに関する遺跡及び遺跡と考えられるものは近江全域でその存在が確認されているということである。この分布状況は、同時代の他地域と見比べてみた場合、石材を産出する地域である日本海沿岸部の山陰から北陸にかけての地域に、比較的近い密度の分布状況を示している。このことは、石材を産出できない地域のあり方としては特異なあり方を示す地域であるといえるのではないだろうか。

またこのような遺跡は、物を引き寄せる力のある拠点集落がその近くもしくはその遺跡そのものであるということ合わせて述べることができると考えられる。なお、これはこの後に述べる古墳時代においても同じことが言えるようである。

以上のような点だけに注目してみると、玉造りという技術は、弥生時代中期には一般的な技術であったということができ、石材についても他の物資と同様に流通していたものであると考えられる。

## (2) 古墳時代前期

古墳時代前期の玉造りを行なっている遺跡は、先に述べた弥生時代の玉造り遺跡の数に比べるとはるかに少なくなる。近江においてこれまでのところ確認されている遺跡は、高月南遺跡（高月町）、鴨田遺跡（長浜市）、辻遺跡（栗東町）の3遺跡に限られている。

これら3つの遺跡に共通して指摘できることは、古墳時代前期の特徴的な遺物である石製宝器を製作している可能性を指摘できるということである。ちなみに、各遺跡から報告されている石製宝器は、高月南遺跡においては碧玉製紡錘車、鴨田遺跡においては車輪石、辻遺跡においては碧玉製石釧及び碧玉製紡錘車である。もちろん管玉などの玉造りも行なっているが、このような当時のもっとも高いレベルの流通に乗るような玉造りを行なっていたということは、これらの遺跡がより広い流通網の中で存在していた可能性を示しているといえることができると思われる。

また、さきの弥生時代の遺跡数と比べて、僅かに3遺跡と非常に遺跡数が少なくなるという状況は、たとえ今後新たな遺跡が確認されたとしても大きく変わることはないものと思われる。このことは、玉造り遺跡が弥生時代においてほぼ県下全域で見られたように、それほど特殊な技術でなかったにもかかわらず、古墳時代前期においてその遺跡数が大きく減少もしくは集約されているということは、ここに何らかの規制もしくは玉をめぐる社会的な変化が生じた可能性を指摘できると思われる。なお、弥生時代やこの頃においても流通ルートとなる中に、琵琶湖及び河川を使用するルートが存在していたとされており、むしろそれは古墳時代になって重要性を増していたのではないかと考えられる。従って弥生時代において認められたように、石材は多くの地点を通り3遺跡に運ばれて来ていたはずである。つまり、石材の入手の容易さという点に関しては何等弥生時代と変わらなかったと思われる。その点を理解すれば弥生時代の玉造りが持っていた背景とは異なる背景を持っていると考えられるのではなかろうか。

ここで、他地域の状況を若干見ておきたい。同時期のこのような遺跡としては、主として北陸地域に典型的な遺跡が多く認められ、有名なものには石川県加賀市の片山津遺跡や、同金沢市の塚崎遺跡などを挙げる事ができる。これらの遺跡については近江で認められているような遺跡よりも、出土遺物やその遺構などから極めて生産が大規模に行なわれていたことが伺え、近江の3遺跡とは様相を異にしている。具体的には、これらの遺跡及びその周辺の遺跡からは、石製腕飾類をくり抜いたときにできるくり抜き円盤や、鍬型石・石釧・車輪石の未製品、原石（碧玉及びメノウなど）などが数多く出土している。なお、これらの遺跡から出土している原石の大きさ及び量は、県内の遺跡から出土している原石の大きさ及び量ををはるかに上回るものであり、とくに片山津遺跡においては、現在でも遺跡内において多量のチップなどが表採できるぐらいである。<sup>(5)</sup>

北陸地域の以上のような状況は、近江との比較において石材産出地との距離差云々以上の違いを感じさせる。そこには、石製腕飾類の製作という点での共通の下に近江において認められる遺跡とは異なった何らかの力が働いているのではないだろうか。

なお、片山津遺跡周辺においても、弥生時代にみられた玉造り遺跡は生産を辞め、古墳時代前

期になって突如として出現した片山津遺跡のみが玉生産（石製腕飾類の製作を中心とした生産）を大規模に行なっているようである。つまりこれは、この地域の玉造りという技術が集約されたとみて取ることが出来るのではなかろうか。これは、近江において遺跡が減少もしくは集約される動きによく似ている。

#### ・北谷11号墳出土の鍬形石について

北谷11号墳は、滋賀県草津市山寺町北谷に位置する墳長105mを測る前方後円墳である。<sup>(6)</sup>この北谷11号墳は、後円部に設けられた内部主体である粘土槨を持つ。この粘土槨中に納められた割竹型木棺内及び棺外からは多くの遺物が出土しているのであるが、その中に鍬形石5点が含まれていた。これら鍬形石の出土状況は、棺内3点・棺外2点であったがそれらの中に未製品と考えられるものが棺内の1点に認められ、また碧玉でなく滑石によって造られたものが棺外の1点に含まれている。

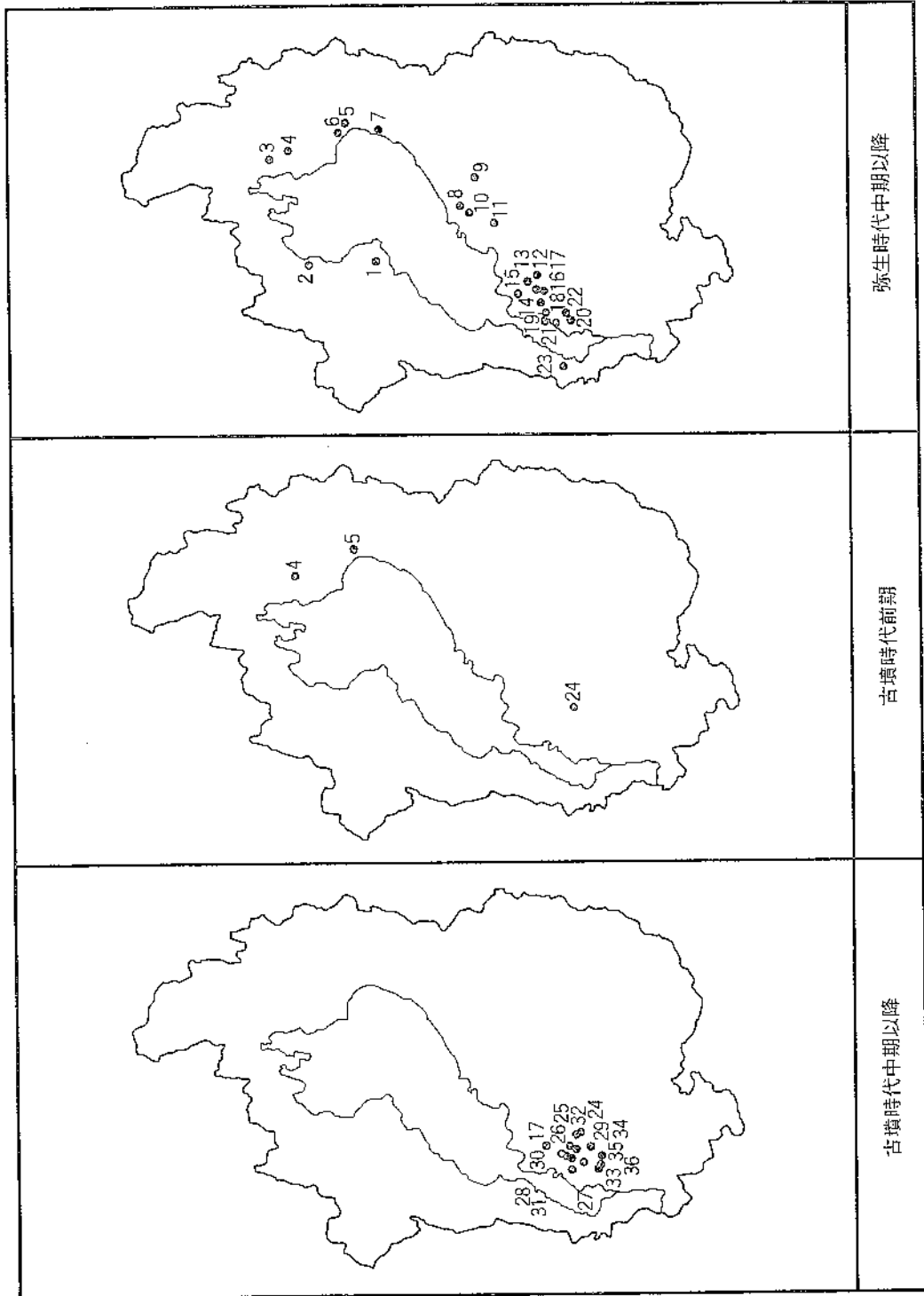
未製品の鍬形石は、全長17.2cm・環状部内径7.5cm×6.0cm・板状部幅11.95cm・重さ310gを測るものである。この数値から他のものと比較してみると、環状部内径以外は未製品ということもあって大きくまた重い。従って当然のことながら製品自体は、細部の研磨などを残している状態であり、ほぼ完成に近い状態まで造られているものと考えられる。なお、鍬形石の未製品が確認された他の例としては集落遺跡から出土したものだけのようであり、古墳の副葬品として鍬形石が検出された例はこの1例だけのようである。

一方、滑石製の鍬形石は、全長16.25cm・環状部内径7.1cm×5.3cm・板状部幅9.5cm・重さ262gを測るものである。この鍬形石は、他の碧玉製の鍬形石とほぼ同じ加工の工程を経ているものと思われるが、その加工は極めて粗雑であり碧玉製品において明確な加工を認められる部分も線を書いたような加工の程度であり、碧玉製品のものとは比べてみれば極めて見劣りのするものである。

以上のような特徴のある北谷11号墳の鍬形石であるが、そこにはさまざまな問題を含んでいるものと考えられる。それらの問題についてここで触れることができるだけの力は持ちえていないが、すくなくともこのような特徴的な鍬形石の存在は、この地域における玉造りを考えていくうえにおいて重要であり、また特徴づけるものであるということは明白である。そこでこの問題の見通しについてふれてみたい。

先学の指摘するものではあるが、他の古墳では副葬品として例をみない鍬形石の未製品が含まれているということは、この古墳の持つエリアに鍬形石の製作に関わる遺跡が存在するということを示唆しているのではないかとのことであった。したがってそれは、指摘されているようにさきに記した栗東町の辻遺跡で石釧などの碧玉製品が製作されていたということにより裏付けられたと捉えることができるであろう。<sup>(7)</sup>更に滑石製の鍬形石についても、以上のように製作を行なう遺跡が存在するとすれば、そこにおいて本来の石材とは異なる石材によって何等かの要因により製作されたものであるといったように考えることも可能なわけである。

つまり、北谷11号墳のような古墳が存在することは、この地域における玉造りの持つ特徴（石



第20図 主要玉造り関係遺跡位置図

弥生時代中期以降

	遺跡名	原石	玉類	未製品	チップ	玉砥石	砥石	工房跡	工具など
1	南市東遺跡	0	1	1	0	1	0	0	0
2	北仰西海道遺跡	1	0	1	1	1	0	1	1
3	横山遺跡	1	1	1	1	1	1	1	1
4	高月南遺跡	0	1	1	1	1	1	1	1
5	鴨田遺跡	1	0	1	0	1	1	0	1
6	塚町遺跡	1	1	1	0	0	0	0	1
7	立花遺跡	1	1	1	1	1	0	0	1
8	宮の前遺跡	1	0	0	1	0	1	0	0
9	梁瀬遺跡	0	0	1	1	1	0	1	1
10	大中ノ湖遺跡	0	0	1	1	1	0	0	0
11	高木遺跡	0	0	0	1	0	0	0	0
12	市三宅東遺跡	0	0	1	0	0	1	1	1
13	八夫遺跡	0	0	1	0	0	0	0	1
14	寺中遺跡	0	0	0	0	0	0	0	1
15	服部遺跡	0	0	0	0	0	0	0	1
16	下ノ郷遺跡	0	0	0	0	0	0	0	1
17	播磨田東遺跡	0	0	0	0	0	1	0	1
18	小津浜遺跡	0	0	0	0	0	1	0	0
19	烏丸崎遺跡	0	1	0	0	1	0	1	0
20	宮前遺跡	0	1	1	1	1	1	0	0
21	七条浦遺跡	0	0	0	0	1	0	0	0
22	靈仙寺遺跡	0	0	0	0	0	0	0	1
23	錦織遺跡	0	0	0	0	1	0	0	0

古墳時代前期

	遺跡名	原石	玉類	未製品	チップ	玉砥石	砥石	工房跡	石製宝器
4	高月南遺跡	0	1	1	1	1	1	1	1
5	鴨田遺跡	1	0	0	0	1	1	0	1
24	辻遺跡	1	1	1	1	1	1	1	1

古墳時代中期以降

	遺跡名	原石	玉類	未製品	チップ	玉砥石	砥石	住居跡	石製品
17	播磨田東遺跡	1	1	1	1	0	0	1	1
25	吉身南遺跡	1	1	0	1	0	0	1	1
26	吉身北遺跡	1	1	1	1	0	0	1	1
27	横江遺跡	1	1	0	0	0	0	0	1
28	金森東遺跡	0	1	0	1	0	0	1	1
29	岡遺跡	0	1	0	1	0	0	0	0
30	吉身西遺跡	1	1	1	1	0	0	1	1
31	占高遺跡	1	1	1	1	0	0	0	1
24	辻遺跡	1	1	1	1	1	0	1	1
32	岩畑遺跡	1	0	0	0	0	0	1	1
33	谷遺跡	1	1	1	1	0	0	1	1
34	門ヶ町遺跡	1	1	1	1	0	0	1	1
35	柳遺跡	1	1	1	1	0	0	1	1
36	中畑遺跡	1	1	1	1	0	0	1	1

\*なお表に記してある1及び0は、現在までに確認している及び確認していないを示す。

表10 主要玉造り関係遺跡と主な出土遺物



製腕飾類の製作)をより裏付けるものとして考えられるということを改めて示しておきたい。

### (3) 古墳時代中期以降

古墳時代中期以降になると全国的に使用目的の変化から需要の拡大が起り、また、玉造り遺跡自体のあり方にも変化が起こるとされる。

このころの近江における玉出土遺跡に関しては、近江全域において各地で認められるようである。<sup>(8)(9)</sup>しかしながら、確実に生産を行っていたということがいえるのは、播磨田東遺跡・吉身北遺跡・吉身南遺跡(守山市)、辻遺跡・岩畑遺跡(栗東町)、中畑・谷遺跡・門ヶ町遺跡<sup>(10)</sup>・柳遺跡(草津市)などを中心とした野洲・栗太郡地域に限られているという見方が示されている。それは、弥生時代から玉造りを行ってきた高月南遺跡においても、滑石製品が出土するものすべてが完成品であるという報告がなされているように、そこには玉造りという行為を積極的に認められないようである。

しかしながら、一地域に限られるとは言うもののこの地域内において認められる遺跡は、古墳時代前期に比べるとはるかに増加しており、そこには玉造りがある一定の地域ではあるものの再び分散されるという大きな変化を認めることができる。

このころにおける玉生産は、滑石という比較的加工の容易な石材を用いて大量に生産を行なうようになったのであるが、それはこれまで活発な生産を行なっていなかった畿内における玉造りにも変化を与えている。例えばそれは、曾我遺跡のような他に類を見ないほどの極めて大規模な玉生産を行なう遺跡が出現していることなどを例としてあげることができる。なおこの曾我遺跡においては、使用石材の多様さ・石材に基づく玉生産の分業化など、この時期までの玉生産のあり方とは根本的に異なるような状況が見受けられるようである。

このような動きは、近江の上述のような一地域に集約されて玉造りの遺跡が認められるという状況と照らし合わせてみると、まったく無関係というわけではないのかもしれない。なお、野洲・栗太郡に認められる玉造り遺跡をひとつのつながりのもとに形成されているものとして捉えることが可能であるとすれば、その生産力は相当なものであろう。ただ、近江全域の遺跡で見られる玉が、この地から一元的に供給されていたかどうかは今後の検討を有するものと思われる。

最後に、片山津遺跡など古墳時代前期の石製腕飾類を含む玉造りの地域として際立った存在であった北陸地方においては、この段階になると玉造り遺跡は顕著には認めることはできなくなり、他地域へと製作地が移るようである。<sup>(11)</sup>この点においては、野洲・栗太郡に認められる玉造りの動きとはやや異なる。このちがいは、石製腕飾類の需要がなくなったことや使用石材の変化などということによって理解されるものなのかもしれないが、古墳時代前期において両地域に働きかけられていると考えられた何等かの力というものが、そもそも異なっている可能性があるということと考えられるのではなからうか。

### 3. まとめ

以上のように、たいへん粗雑であったが近江における玉造りの状況を、時代を追ってまとめて

みた。なお、ここでは触れていない近江の玉造りに関する問題も多く残している。今後の課題としておきたい。

では、この中から今回の研究地域である野洲・栗太郡について最後にもう一度まとめてみたい。野洲・栗太郡における玉造りは、烏丸崎遺跡などに見られるように弥生時代中期の古い段階から行なわれている。ただこの時点においては、その他の地域となんら変わらない背景により玉造りを行なっていたものと考えられる。しかしながら続く古墳時代前期になって、多くの地域では認められなくなり、集約された形で玉造りを行なう遺跡がわずかに認められるようになった時点においても、この地域においては辻遺跡に見られるように碧玉を使用し、石製宝器を造っていたと見られるような遺跡が確認されている。このことは、この地域に先に見たような特徴的な鍬形石を持つ北谷11号墳が存在するということからも裏付けられており、また安養寺古墳群中に認められるような石製宝器を副葬している円墳が存在するという状況も注意する必要があると考えられている。この様な古墳時代前期における玉造りは、この地域及び近江における玉造りを考える上で非常に重要な要素であると思われる。更に、古墳時代中期以降になると畿内の動きと密接な動きのもとに成立しているということを想定することができる可能性を含みつつ、近江における玉造りはこの地域に集約されることとなるようである。

以上のような玉造りにおける状況から、この野洲・栗太郡という地域は、各時代を通じその社会の中で少なくともより広範な流通網の中で存在し、またより高いレベルでの畿内政権及び他地域との関係を持っていたということがいえるのではないだろうか。そして、古墳時代中期以降においてこの地域は、近江の中で唯一玉造りを行なっており少なくとも近江の中において玉生産及び供給の中心地であったといえる。このように、野洲栗太郡は極めて特異な様相を示しているといえることができる。

## 註

- (1) 辻遺跡現地説明会資料、栗東町教育委員会・(財)栗東町文化体育振興事業団 1995年10月14日滋賀県埋蔵文化財センター「滋賀埋文ニュース第188号」 1995年11月30日
- (2) 近江における弥生時代の玉造りについては、黒坂秀樹氏の研究に詳しい。（「近江における弥生時代玉造り研究ノート」「滋賀考古」第3号 1990年1月）
- (3) 草津市宮前遺跡については、調査担当者神保忠宏氏・岩橋隆志氏に御教示を得た。
- (4) 各遺跡については、表及び地図を参照されたい。なお、表及び地図は本文で使用した資料などをもとに加筆し作製した。なお、ここに挙げた遺跡以外の遺跡も確認されている可能性もあるが、筆者の力不足で確認することができなかった。
- (5) なお、それらの遺跡・遺物に関しては石川県埋文センター北野博司氏・金沢市教育委員会出越茂和氏・加賀市教育委員会田島正和氏のご好意により、実見及び御教示を得る機会を得ることができた。
- (6) 中司照世・川西宏幸「滋賀県北谷11号墳の研究」「考古学雑誌」第66巻 第2号 1980年9月
- (7) 註1
- (8) 近江の古墳時代における玉造りをつつめた代表的な論文としては、以下のものがある。

丸山竜平「近江における古墳時代玉造り遺跡と物部祭祀集団」『松前健教授古稀記念論文集神々の祭祀と伝承』同朋舎出版 1993年6月

丸山氏の論文は、近江の古墳時代における玉造りを祭祀との関わりの下に論じられ、その中で極めて鋭い指摘がなされている。結果として今回記したものの中には、丸山氏の指摘する点を多く含むこととなった。しかしながら、近江の玉造りに認められる様相を氏族と結びつけて考えられている点に関しては、慎重に考えたい。

- (9) 山崎秀二「野洲川流域における滑石製品にかかる覚書き」『古高遺跡発掘調査報告書』守山市文化財調査報告書第31冊 守山市教育委員会 1988年3月
- (10) 草津市教育委員会「草津市文化財調査報告書23 1992年度文化財年報」 1994年3月
- (11) 「北陸の玉 古代のアクセサリ」福井県立博物館 1994年

#### 参考文献

- 1. 寺村光晴『古代玉造形成史の研究』吉川弘文館 1980年12月
- 2. 河村好光「玉生産の展開と流通」『岩波講座日本考古学』3 生産と流通 1986年3月
- 3. 関川尚功「古墳時代における畿内の玉生産」『末永先生米寿記念献呈論文集』1985年4月
- 4. 野洲町立歴史民俗資料館『古代の玉と玉作りー市三宅東遺跡と近江の玉作りー』 1991年7月

編 集 後 記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年には当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしへの渡りびと—近江の渡来文化—』や、それと関連したシンポジウムを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。 平成8年3月

平成8年3月

紀 要 第 9 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668